

英語教職課程の学生の発音矯正の試み

佐野富士子, 相葉吉輝, 厨子真由美*

A pilot study of pronunciation instruction for teacher-candidate students

Fujiko SANO, Yoshiteru AIBA, Mayumi ZUSHI*

2019年11月11日受理

Abstract

This pilot study explores how self-regulated training of English pronunciation improves students' awareness of clear articulation and develops their pronunciation skills. A total of eleven pre-service English teachers, studying at the Department of Foreign Language Studies, Tokoha University, participated in the small scale study. They volunteered to execute pronunciation practice by themselves with CD listening materials. The results indicate that the participants found some English sounds more challenging to learn than others. However, this study produced mixed results. Some limitations of this study are the number of participants, limited exposure to the target language, lack of information about the amount and type of prior pronunciation learning experiences, lack of opportunities to provide face-to-face instruction sessions, and lack of a control group.

キーワード：発音矯正、母音、子音、発音指導、訂正フィードバック

1. はじめに

英語は今や世界共通語 (English as a Lingua Franca / ELF) と捉えられている。そのような時代であるからこそ、意味伝達の重要なツールのひとつである発音は、母語話者や第二言語としての英語話者が聞いて理解できるような発音を身につけなくてはならない。国際的な場でコミュニケーションする際に、こちらから発信する音声面で齟齬があれば、意味の伝達は難しい。

しかし、日本で英語を学ぶ生徒・学生にとって、外国語学習環境という制約のある環境で英語の発音を上達させるのは容易ではない。第一に、第一言語 (L1) の影響

* 本学非常勤講師

を受けて日本語訛りが発生する。母語の影響を受けやすいのは、音韻、形態素、統語であるが、中でも実際に発音する際の音素、アクセント、イントネーションの全てにL1の影響が出てしまう。この現象は中間言語の1つの段階として意味はあるものの、異文化交流をするためには、少しの日本語訛りがあっても様々なL1の背景をもつ人々に聞き取ってもらえる発音を身につける必要がある。しかも、外国語学習環境にあっては、音声面の指導と矯正はただ手本を聞かせるだけでは大きな効果は期待できない。指導者の指導技術と学習者自身の学習意欲が必要である。

1970年以降、世界中でコミュニケーションな英語指導法が主流を占めてきたため、英語を言語として使うことに重きが置かれ、言語の正確さ、特に音韻面の正確さは指導や研究の中心から外れて久しい。その結果、指導書も豊富には得られず、教師は発音指導には自分の勘や経験に頼らざるを得ない。Bachman(1990)が文法能力はコミュニケーションな言語能力の一部であると図示してから、syntaxとしての文法指導には注目が集まり重点が置かれるようになったものの、phonologyに関する研究に基づく発音指導は未だ需要を満たしていない。そのうえ、生徒としては英語の発音に対するフィードバックをしてもらう学びの機会が極めて少ない。

そのような困難な状況にあっても、本学では英語科教員になることを目指している学生が毎年十数名おり、発音指導の機会の必要性を感じていた。3年次から開講される英語科教育法の授業内で模擬授業を行うたび、英語科教員を目指す学生の発音の正確さが教員として充分ではないと課題を感じていた。しかし、2017年度までは2年次までに個々の学生の発音を矯正する授業は開講されておらず、コンピュータを使った音声の個別学習ができるCALL教室もないことから、授業外で発音を向上させる自由課題の可能性を探るパイロット・スタディを行うことにした。

2. コミュニケーションに必要な音声面の基礎理論

2.1. 調音音声学

英語の音声面を研究する音声学(phonetics)には研究の焦点をどこに置くかによって、調音音声学(articulatory phonetics)、音響音声学(acoustic phonetics)、聴覚音声学(auditory phonetics)に分かれる。音響音声学は主に音波を使ってどのように音声伝播するかを研究する分野であり、聴覚音声学は音がどのように聴取されるかを研究する分野である。本研究では発音指導と学習を目的とするため、英語の音をどのように調音するのかに焦点を置く調音音声学を基礎知識として扱う。そのため、本稿では言語音を調音音声学で用いる角括弧[]に入れて表す。また、英語の音声面の不具合を起こしうる原因には発音だけではなく、音連結やイントネーションに関する知識も必須ではあるが、本稿では音声のみを扱う。音連結を学ぶ前に音素そのものを学ぶ必要があることと、イントネーションは言語表現、いわゆる、発話の構造上の種類または伝達内容上の相違を明示するだけでなく、話者の多様な心情的態度を反映するものであり、個人的な癖や主観によっても影響を受けやすいため、本稿では扱わない。

2.2. 英語の音声：母音

全ての言語の音声は母音と子音に分けることができるという。英語も母音と子音に分けることができる。山根(2019)の定義によると、母音とは、肺からの呼気が口腔内で妨害を受けずに生まれる有声音で、子音は調音器官の働きによって、気道内で呼気の流れが妨害されたり、狭められたりしてできる音で、声帯が振動する有声音と、振動しない無声音があるという。母音は調音の際の舌の位置や唇の形状や口（あご）のわずかな動きによって3つに分類される。竹林・斎藤(1998)は、(1)舌のどの部分が最も持ち上がるか、(2)どの高さまで上がるか、(3)唇の形で分類されると記述している。

(1) 舌の持ち上がる位置による分類

- a. 前母音 [i:] [ɪ] [e] [ɛ] [æ] [a]
- b. 後母音 [ɑ:] [ɑ/ɔ] [ɔ:] [ʌ] [o] [ʊ] [u:]
- c. 中央母音 [ə:] [ə]

(2) 舌の持ち上がる高さによる分類

- d. 高母音 [i:] [ɪ] [ʊ] [u:]
- e. 中母音 [e] [ə:] [ə] [o]
- f. 低母音 [ɛ] [æ] [a] [ʌ] [ɑ:] [ɑ/ɔ] [ɔ:] [ʌ]

(3) 唇の丸めの有無による分類

- g. 円唇音 [u:] [ʊ] [o] [ɔ:] [ɔ]
- h. 非円唇音 その他の母音

以上のように、母音はすべて有声音であり、舌の高低位置、舌の前後位置、唇の形状、の3基準により分類される。上記の(1)～(2)の位置関係を表で示すと、以下の表1にまとめることができる。

表1 英語の母音の分類（三宅川・増山, 1986）

舌の前後位置 舌の高低位置	前 母 音	中央母音	後 母 音
高 母 音	i: ɪ		u: ʊ
中 母 音	e	ə: ə	o
低 母 音	ɛ æ a		ʌ ɑ: ɑ

また、これら英語の母音と日本語の母音の位置関係を合わせて示すと、図1のようになり、日本語の母音と英語の母音とでは、似たような音であっても調音点が異なっていることが視覚的にも明確に認識できる。

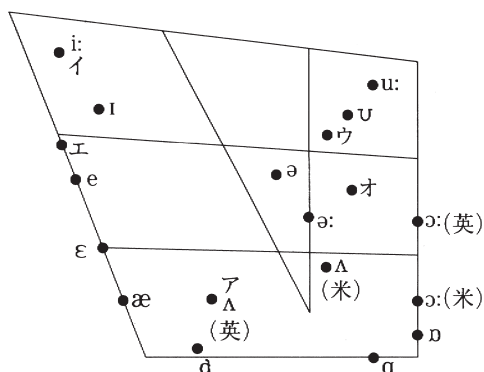


図1 日・英語の母音四角形（大高，1998）

2.3 日本人学習者がとらえる英語の母音

日本人学習者が日本語の環境で英語を学ぶと、学習の初期においてはL1の影響が強く出て、いくつかの英語の母音を1つの日本語の母音に近づけて聞き取ってしまう現象がみられる。さらに山根(2019)は日本人が英語の発音を日本語の母音で代用しがちであると指摘している。以下は共通した苦手な発音である。

日本語	英語
イ	[i:] [I]
エ	[e] [ε]
ア	[æ] [ɑ] [ʌ] [ə] [ə:]
オ	[ɔ:] [ɑ]
ウ	[u:] [ʊ]

2.4 英語の音声：子音

子音とは、有声音、無声音を問わず、声門を通過したあとに、口腔内のどこかで妨害を受け、摩擦(friction)あるいは一時的な閉鎖(stop)を生じる音である。例外的に[w][j]と米音の[r]はそのような妨害をほとんど伴わないという意味で母音的な性格が強く、半母音と呼ばれることもある。子音の分類は以下に示す(三宅川・増山, 1986)。

A. 調音位置(Place of articulation)による分類

- (1) 両唇音(Bilabials)：上下の唇を接触・接近。
- (2) 唇歯音(Labio-dentals)：下唇と上歯を接触・接近。

- (3) 歯音 (Dentals): 舌先を上歯に接近、または上下の歯の狭い隙間に舌先を置く。
- (4) 歯茎音 (Alveolars): 舌先を上歯茎に接触・接近。
- (5) 硬口蓋・歯茎音 (Palato-alveolars): 前舌を歯茎硬口蓋部に接触・接近。
- (6) 硬口蓋音 (Palatal): 前舌を硬口蓋に接触・接近。
- (7) 軟口蓋音 (Velars): 後舌を軟口蓋に接触・接近。
- (8) 声門音 (Glottal): 開いた声門の隙間で調音。

B. 調音方法 (Manner of Articulation) による分類

- (1) 閉鎖「破裂」音 (Stops or Plosives): 声道 (vocal tract) の箇所をいったん閉鎖 (stop) し、急に開放 (release) することによって作られる音声。
- (2) 鼻音 (Nasals): 軟口蓋が下がって、鼻腔共鳴が生じることで作られる音声。
- (3) 側音 (Lateral): 舌先を歯茎につけたまま息を舌の両側から出すことによって作られる音声。
- (4) 摩擦音 (Fricatives): 上下の調音器官が接近することにより、そこを通る呼気の摩擦 (friction) により生じる音声。
- (5) 破擦音 (Affricates): 破裂と摩擦の両方によって作られる音声。
- (6) 半母音 (Semivowels): 摩擦が少なく、母音の特徴を持つ音声。

表 2 英語の子音の分類 (三宅川・増山, 1986)

調音位置 調音方法		両唇音	唇歯音	歯音	歯茎音	硬口蓋・ 歯茎音	硬口蓋音	軟口蓋音	声門音
閉鎖 [破裂]音	無声	p			t			k	
	有声	b			d			g	
鼻音	無声				n			ŋ	
	有声	m							
側音	無声				l				
	有声								
摩擦音	無声		f	θ	s	ʃ			h
	有声		v	ð	z r	ʒ			
破擦音	無声				(ts)	tʃ			
	有声				(dz)	dʒ			
半母音	無声					r	j		
	有声	w							

2.5 日本人が苦手な子音

日本人学習者として発音を学ぶ上で注意を要するのは、日本語には無い子音 (例:[f] [v] [ð] [θ]) と、似た音があっても調音点が異なる音 (例:[r] [l] [ʃ] [w] [p] [t] [k] [h])

である。表2の分類から、摩擦音、側音、半母音、無声の閉鎖音であることがわかる。

3. 発音指導のパラダイムシフト

3.1 共通語としての英語 (English as a Lingua Franca : ELF)

世界的規模で国際化と ICT 化が進み、ビジネスの世界でも科学技術、学問の世界でも英語を共通言語として情報伝達行動を行うようになった。Jenkins, et al. (2011) が ELF を以下のように定義づけている。

---it is described simply as 'an additionally acquired language system which serves as a common means of communication for speakers of different first languages'. (p.283)

もはや ESL (English as a second language), EFL (English as a foreign language) との境目が崩れつつあり、英語は母語に加えて使えるようになった言語と言えよう。

英語を ELF ととらえることの浸透により、発音を聞くコンテキストが社会的に変化し、非母語話者同士でお互いの英語を聞いて意味の伝達活動を行う場面が増えている。話し手・聞き手間の聞き取りやすさを調査する上で、従来のような母語話者の発音を非母語話者が聞き取れないとか、非母語話者の訛りを含んだ発音を母語話者が聞き取りづらい、といったコンテキストだけに止まらず、非母語話者同士が英語を使って情報交換する時代になった。このことを踏まえ、発音指導を研究する上で、母語の背景と社会的コンテキストを踏まえることの重要性を Levis (2005) は以下のように図示している。

		LISTENER	
		Native Speaker	Nonnative Speaker
SPEAKER	Native Speaker	A. NS-NS	B. NS-NNS
	Nonnative Speaker	C. NNS-NS	D. NNS-NNS

表3 Speaker-Listener Intelligibility Matrix (Levis, 2005, p.372)

3.2 発音の測定に関する考え方の変化

パラダイムシフトにより、発音指導をどう行うか、またその結果をどう測定するかにも変化が出てきている。非母語話者同士の、音声の正確さが母語話者レベルではない話者同士の伝達活動の場が増えたことを踏まえて Thomson & Derwing (2014) が注意喚起しているのは以下の3点である。

- (1) 従来は母語話者の発音ができるようになることを目標としていた。
- (2) コンピュータを活用した指導 (computer assisted pronunciation teaching, : CAPT) が隆盛し、個音の発音の指導に止まるが多かった。

- (3) 個々の発音に注目すると segmental の測定が中心となり、会話をするときの大きな阻害要因となる発話全体のリズムやイントネーションの崩れや間違いといった suprasegmental な面はやや軽視される傾向がある。

言い換えると、従前のように個音の正確さを重視するだけではなく、これからは発話全体の意味の通じやすさにも重点をおくべきである。しかし、指導の効果を測定する方法としては、音読が一般的で、この方法は従来と変わりがない。

3.3 発音学習の目標

英語圏での生活経験が無い、またはほとんど無い英語学習者にとって、母語話者の発音を身につけることは極めて難しい。しかしながら、国際的な場に出て行って、様々な母語をもつ人たちとコミュニケーションすることを求められる時代になったこと、Saito & Lyster (2012), Saito (2013) らの研究により大人であっても発音指導は効果があると示されたことを踏まえると、非母語話者には現実的な目標を設定することが妥当であると考え、Derwing & Munro (2005) は表 2 で示す発音の通じやすさに関する 3 つの側面(1)明瞭性 (intelligibility)、(2)理解性 (comprehensibility)、(3)訛りの度合い (accentedness) を理解し、外国人訛りはどこまでが許容範囲かを見極めて、発音指導の目標を定めることが妥当であるとしている。

表 4 Intelligibility, Comprehensibility, and Accentedness
(Derwing & Munro, 2005, p.385)

Term	Definition	Measure
Intelligibility	The extent to which a listener actually understands an utterance	Transcription task % words correct
Comprehensibility	A listener's perception of how difficult it is to understand utterance	Scalar judgment task 1 = extremely easy to 9 = extremely difficult to understand
Accentedness	A listener's perception of how different a speaker's accent is from that of the L1 community	Scalar judgement task 1 = no accent 9 = extremely strong accent

3.4 外国人訛りと発音の正確さ

上述の Jenkins, et al. (2011) は非母語話者たちが使う ELF の特徴をとらえている。情報交換の場で発音の違いが意味の違いをもたらすような重要な局面では、自分が伝えたいことを理解してもらうために、「音声面での調停 (phonological accommodation)」を使って正確に発音し、意味伝達上に重要な役割を果たさない部分では non-standard な発音を用いるという (p.287)。非母語話者が気をつけて発音するのは、[θ] [ð] などの摩擦音、語頭の子音連続、母音の長さの区別 (ough vs. ou,

ee vs. i など) であると指摘している。

日本人の英語学習者による発音の問題点を音素レベルで指摘した研究がある。Saito (2011) はニューヨークにある大学レベルの学校で学んでいる日本人 20 名を対象に、日本人の発音で母語話者が混乱を起こしやすい 8 の音素 [æ] [f] [v] [θ] [ð] [w] [l] [ɹ] を選び、音読してもらったところ、これら 8 つの音素が入っていない文のほうは聞き取りやすく、これらが入っている文章を聞いても、意味の解釈が難し面があることを統計的に示している。

さらに Saito & van Poeteren (2012) は非母語話者が話す英語の音声面のどの面が上達すると、母語話者に近くなるのかに関して、(1)話す速度、(2)音の明瞭さ、(3)語と語のつながり具合の 3 点について精査したところ、音の明瞭さが最も顕著な影響を与えることを見つけた。日本人学習者としては、英語らしい英語の音 [æ] [f] [v] [θ] [ð] [l] [r] [w] などの特徴的な音に気をつけて発音すれば、英語が上手に聞こえるということになる。

3.5 外国語学習者に向けた発音の指導に関する研究

第二言語習得研究の発展につれて、発音も習得のプロセスに沿った指導を行えば上達するのではないか、という探求が始まった。例えば、平野・佐野・今井 (2011) では小学生に Focus-on-form という手法を用いて [t] [s] の音を指導した結果、子音が発声される前の有声開始時間 (VOT: voice onset time) と呼ばれる声帯の振動が子音の区間で振動が起こり、母語話者の状態に近くなり、音も日本語の音声から英語の音声 (two, six) が出るようになった。さらに、Saito & Lyster (2012) は日本人大学生を対象に [r] の発音指導を「言語形式に焦点を置いた指導 (Form focused instruction / FFI)」と、FFI に訂正フィードバック (corrective feedback / CF) を組み合わせた指導を行った結果、FFI のみのグループより、CF を組み合わせたグループにより大きな効果が見られた。また、Saito (2015) では日本人の発音のどこを向上させれば非母語話者であっても国際的な場でコミュニケーションを良好に行うことができるかの特定を行い、[f] [v] [r] [l] [θ] であると特定した。

3.6 英語の音声と聞き取りやすさとの関係

以上の先行研究の結果から、日本人も発音の訓練を受ければ、聞き取りやすい発音で話すことができるようになることがわかった。異言語を母語とする人たちとコミュニケーションするためには、必要最低限なレベルとして、聞き手にとっての聞き取りやすさが挙げられるが、英語科教員を目指すならそれ以上のレベルになることを目標とさせたい。そこで日本人にとって現実的な目標設定として聞き取りやすさから、Saito (2011) が扱った 8 つの音 [æ] [f] [v] [θ] [ð] [l] [r] [w] のうち、子音のみを発音指導重点項目として取り上げ、3 年次で英語の模擬授業を行うための音声面のスキルを向上させることができるか、2 年次生の自由課題として試行した。研究課題は以下のとおりである。

RQ1 日本人が苦手とする英語音 [f] [v] [θ] [ð] [l] [r] を聞き取ることができるようになれば、発音することができるか。

RQ2 発音はフィードバックを受けると上達するか。

4. 研究方法

4.1 研究課題

日本人大学生は音声 CD を使ったリスニングと発音学習を自律的に行ってどこまで成果を出すことができるか、発音できるようになったつもりで実は日本人訛りの特徴を有しているところはどこなのか、に対する解答を探ることが目的である。課題の主な着眼点は、日本人訛りが出やすいと言われている母音と子音である。

4.2 研究参加者

英語科の教員になることを目指している大学 2 年生のうち呼びかけに応じた 11 名である。この 11 名を実験群としたため、統制群はない。実験参加者は外国語学部の 2 年生全体に開講されている英語音声学は受講しているため、英語の発音に関する基礎知識はある。外国語学部の学生として発音を良くしたいという意欲もある。そのため、ひどく聞きづらい発音をする学生は見当たらない。英語力全体を向上させたいという意図は持っているものの、将来、英語科教員になることの意識づけと自信が充分とはいえない段階にある。自分の英語を生徒にインプットする音声材料にする技術はまだ身につけていない。英語教職課程に特化した音声学は開講されていないことと、英語の教職科目は 3 年生から始まるため、英語の発音をどのように教えるか、どのように発音の手本を示すか、といったことには意識がまだ当たっていない。また、音声学担当者としても担当クラスの受講生全員が教職課程の学生というわけではないので、発音指導に特化したシラバスを作成することも難しい。

4.3 発音矯正の方法

英検準 1 級取得前の大学 2 年生にとって適度な難易度の英語音声を用意し、CD を聞いて、集中して書き取れるまで聞き、CD についてリピートしたりシャドウイングしたり、ディクテーションしたりして、完全に聞き取れるまで聞いて発音練習する自学自習発音矯正プログラムを提示した。英語の教員としての英語の発音ができるように練習すること、との注意を与えた。期間は 3 か月であるが、大学が定めた授業外の自由課題であるので、特に指導のために研究参加者を集めての指導は行わず、事前テストで吹き込んだ発音についてフィードバックを e メールで送った。フィードバックの例を付録に示す。

4.4 測定方法

事前テストとして、ターゲットとする英語の 6 音を含む英文の(1)ディクテーション、(2)英文読み上げを行った。音を聞き取れているかの測定をディクテーションで行うた

め、材料は中学3年生の英語教科書から抜粋した英文を用意し、CDを2度聞かせ、書き取らせた。実際に発音できるかどうかの測定にはread-aloud task(英文読み上げ)を用いた。多くの発音指導の論文では、伸びの測定にread-aloud taskを用いるのが一般的だからである。各自が読み上げる音声を録音し、6音について採点した。3か月の自習のあと、事後テストとして、事前テストと同レベルの英文で(1)ディクテーション、(2)英文読み上げを行った。事前事後テストの伸びをもって3か月に渡る自主学習の成果とみなした。

4.5 分析方法

参加者が11名という小規模研究であるため、統計にかけることはできないが、正用法をカウントするinterlanguage analysisを行った。研究参加者の発音の評価は本研究第1著者と第2著者として行い、評価者間信頼性の確認を行った。

5. 結果

音の聞き取りについて、ディクテーションしたテキストに含まれる音を聞き取って書けたかを点検したところ、以下の表5に示すように、大きな変化はなかった。発音については読み上げた英文に含まれる音素に焦点を当てて正用法を測定したところ、わずかな伸びが見られた。事前テストの時点での発音の困難点は[r][l]が多く、[v][ð][θ][f][v]も困難な音に含まれていたが、事後テストでは[r][l]だけが残った。

表5 音の聞き取りと発音の伸び

	事前テスト平均値	事後テスト平均値
音素の聞き取り (full=6)	5.54	4.64
単語の聞き取り (%)	79.63	84.39
音素の発音 (full=6)	4.00	4.54

6. 考察

発音矯正の指導は対面で行い、正しい音のインプットを豊富に与え、違いが出た音に対しては訂正フィードバックを与え、必要に応じてその音に焦点を置いた発音指導(form-focused instruction)を行うことが多い。しかし、本実験の場合、発音矯正プログラム実施に向けたパイロット調査であり、授業時間内で行うことはできなかったため、英語の音声の調音点などに関する知識は第3共同執筆者の授業内で履修生全員に向けて提供はできたが、授業外での自学自習プログラムであるため、タイミングよく訂正フィードバックを十分に提供できたかという点で課題が残る。したがって、発音の向上は、参加者自身の意識の高まり、必要性和重要性の認識の高まり、発音学習に対する動機づけの高まりに加え、その音に焦点を当てた対面での指導とフィードバックが必須であると考えられる。

7. 結論

発音矯正に特化した授業がないため、授業外のプログラム設置の可能性を探ったところ、[l] [r] 以外の音は比較的早く上達した。統制群を取らなかったため、純粹にこのプログラムの影響であるとは断定できないものの、上達する傾向がみられ、訂正フィードバックの提供については対面の授業の必要性を強く感じられる結果が出た。モデルとなる英語の音声材料も豊富に用意し、学生自身もインターネット等を通じて、日ごろから国際語として英語の音に慣れておく必要がある。

分析方法については、今回は expert judgement という長年鍛えた人間の聴覚を頼りにする手法を取ったが、今後は praat などのソフトを用いてより精密な機材を使った分析を行う可能も探してみたい。

発音指導の面についても、教職の学生には将来の生徒に発音の仕方を教える技術も教えていかななくてはならない。教職を目指す学生が、日本語の影響による英語の発音の音の違いをさらに正確に認識する必要もあろう。教員を目指す学生自身のこれまでの発音指導を受けた経験を振り返って報告してもらい、より大きな効果が期待できそうな発音指導の方法を開発していく必要がある。

今後、発音矯正プログラムを本格始動させるために解決しておかなくてはならない課題は、(1)学生が教員になったときに発音指導するための発音指導技術、(2)学生自身が正確な英語の音を発音できる能力の向上、(3)将来の生徒の発音を聞き分けられる聴力、がプログラムに組み込まれることが必要であろう。さらに、英語の発音は学習目標をどこへ置いたらよいのかについても、国際共通語としての英語という観点から、英語科教員が議論を深め、合意点を得る必要があると思われる。

引用文献

- Bachman, L. (1990). *Fundamental considerations in language testing*. Oxford, UK: Oxford University Press.
- Derwing, T., & Munro, M. (2005). Second language accent and pronunciation teaching: A research-based approach. *TESOL Quarterly*, 39, 379-397.
- 平野幸規・佐野富士子・今井行道 (2011)「小学校における英語音声指導の試行—第二言語習得における子音の音韻発達を中心として」『横浜国立大学 教育人間科学部 紀要 I (教育科学) 第 13 号 pp.41-61.
- Jenkins, J., Cogo, A., & Dewey, M. (2011). Review of developments in research into English as a lingua franca. *Language Teaching*, 44, 281-315.
- Levis, J. (2005). Changing contexts and shifting paradigms in pronunciation teaching. *TESOL Quarterly*, 39, 369-377.
- 三宅川正・増山節夫 (1986)『英語音声学—理論と実践』英宝社
- 大高博美 (1998)『英語音声教育のための基礎理論』成美堂.
- Saito, K. (2011). Identifying problematic segmental features to acquire

- comprehensible pronunciation in EFL settings: The case of Japanese learners of English. *RELC Journal*, 42, 363-378.
- Saito, K. (2013). Reexamining effects of form-focused instruction on L2 pronunciation development. *Studies in Second Language Acquisition*, 35, 1-29.
- Saito, K. (2015). Experience effects on the development of late second language learners' oral proficiency. *Language Learning*, 65, 563-595.
- Saito, K., & Lyster, R. (2012). Effects of form-focused instruction and corrective feedback on L2 pronunciation development of /ɹ/ by Japanese learners of English. *Language Learning*, 62, 595-633.
- Saito, K., & van Poeteren, K. (2012). Pronunciation-specific adjustment strategies for intelligibility in L2 teacher talk: Results and implications of a questionnaire study. *Language Awareness*, 21, 369-385.
- 竹林滋・斎藤弘子 (1998)『英語音声学入門』大修館書店.
- Thomson, R., & Derwing, T. (2014). The effectiveness of L2 pronunciation instruction: A narrative review. *Applied Linguistics*, 36, 326-344.
- 山根繁 (2019)『コミュニケーションのための英語音声学研究』関西大学出版部.

付録

録音された発音に関するフィードバックの例

Aさん

[l] [r] がきれいです。

曖昧母音もきれいです。

Bさん

母音はほぼ発音できていますが、[i:] [æ] [ɑ:] については注意深く正確に発音しましょう。

Cさん

[l] の音をもう少ししっかり出せると、さらに良くなります。舌先を前の歯の付け根にしっかりと打ちつけましょう。

[r] もだいたい [r] に近い音は出ています。上顎の柔らかいところに舌がつかないように、舌を丸めましょう。

Dさん

[æ] の音を英語らしくしましょう。アとエの中間のような音です。

Easy の [z] の音が日本語の「ジー」になっています。

[i:] の音は口を横に強く引っ張って発音してください。

語尾の [n] は舌の先を上顎の一番前のほうに軽く当てて発音します。

Coffee が日本語式の「コーヒー」になっています。電子辞書で発音をチェックしてください。

Minute の i が日本語のイになっています。英語の短い母音の [ɪ] を練習しましょう。

